

## 講義型授業における学生の学びの分析手法の開発 —大学の授業を対象として—

須田 昂宏

2008年度の学士課程におけるFD（Faculty Development：大学教員の教育能力を高めるための実践的方法）の義務化（大学院課程では2007年度）に象徴されるように、現在、大学授業改善に注目が集まっている。

この背景にある問題の1つに大学生の生徒化というものがある。これは、「生徒」とは未熟で他律的、依存的に「教えられる」存在であるのに対して「学生」は自律的、自立的に「学ぶ」者と区別されてきたと捉えた上で、大学全入時代と言われる現代の大学生が前者に近い姿を示すようになってきているという問題である（伊藤、2015）。大学における学問は自らが学んで獲得していくものであり（新立、2010）、大学がそのような学習者を育てる場所であることを考えると、これは大きな社会的問題である。大学の授業も、授業者が学問的知識を話せば学習者は自ずと主体的に考えて学ぶと期待するのは難しくなっているため（伊藤、2015）、他律的に知識を獲得するだけではなく自ら知識を再構成していけるように学習者を導くための授業改善を行っていく必要がある。

授業改善という点では、2012年の「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて」（中教審答申）の影響もあり、アクティブラーニングへの関心が高まっている。アクティブラーニングは書く・話す・発表するなどの活動への関与とそこで生じる認知プロセスの外化を伴うあらゆる能動的な学習のことであり（溝上、2014）、知識・情報・技術が急速に変化し高度な問題解決力や処理能力が求められる現代社会に対応するためにも今後ますます導入が進むものと考えられる。しかし小針（2018）も警鐘を鳴らすように、「授業改善＝アクティブラーニング」と矮小化して考えてしまうのは問題である。アクティブラーニングと対比されることの多い講義も、多くの学習者を対象に幅広い学問的知識を系統的に伝達し知識定着を図るためにも必要不可欠なものであり、講義の質を高める方法を検討していくことは大学教育における重要な課題である。講義という教育形態には限界があるという指摘はあるが（ブライ、1985）、それ以上に、講義の質を高めるための研究・努力が十分に行われてきていない（吉崎・益子、2012；田口、2012）ことこそ問題がある。今後求められる講義のあり方として、溝上（2014）は、単に教員の話をぼうっと聴くのではなく、これまでの知識や経験と摺り合わせて、新しい知識を位置づけたり、思考したり、感動したり、疑問を覚えたりするような講義が必要であると述べており、また松下（2009;2015）は、学生の内的側面における能動性を引き出すような講義が必要であると述べている。このような学生たちが内的に積極的・能動的に聴く講義を実現していくことは、大学授業における重要なテーマである。

「学生たちが内的に積極的・能動的に聴く講義はいかに実現できるか」、この問いに答え

際にまず最も重要になってくるのは現状把握、つまり、現在の大学の授業の中で何が起きているのか、学生がどのように学んでいるのかを解明することである。特に講義型の授業における学生の学びはブラックボックスとして扱われるか、もしくは授業者が話したことをその通りに学生が理解すると考えられる傾向が強いが、もっと具体的にそこでの学びを明らかにしていく必要がある。

そこで本論文では、講義型授業における学生の学びを分析するための手法の開発を行う。小中学校における話し合いの授業のように学習者の発言が多く出現する授業に関してはその「発言」を手掛かりとした学びの分析研究が進められてきているが（日比・的場、1999；的場・柴田、2013；秋田・藤江、2010）、学習者の発言が少ない講義型授業を対象とした研究は蓄積が乏しく（吉崎・益子、2012；田口、2012）、「発言」とは異なる視角から学びを分析する手法を構築していく必要がある。講義型授業における学生の学びを分析する手法を開発し、それによって現在の大学の授業の中で起きている学びを把握することは、のちに学生たちが内的に積極的・能動的に聴く講義を創造していくために役立てられると考えられる。

このような問題意識に基づく本論文は、以下の7章から構成される。

第1章では、まず、トロウ（1976）の言うユニバーサル段階を迎えた日本の高等教育において、大学の大衆化や学生の多様化に対応するために、個別大学の取り組みと高等教育政策の双方から、教育改善、授業改善のムーブメントが起こっているという社会的背景を確認した。またそのような社会的背景の中、学術的には、①欧米の大学授業改善の研究書の翻訳・出版のための研究、②授業評価に関する研究、③学生の学力や気質に関する研究、④授業のノウハウの蓄積に関する研究、⑤授業研究・授業分析に関する研究、⑥授業形態論に関する研究が行われてきているが、総合的に見るとまだまだ量的にも質的にも研究が不足している状況であり、特に⑤授業研究・授業分析に関する研究はその方法論を含めてまだこれからの発展が必要な分野であることを指摘した。これから大学授業研究を発展させていくには、小学校や中学校の授業研究のように授業過程にまで踏み込んで授業における具体的な相互作用や学びそのものに注目した研究を行っていく必要があると判断し、本論文の目的を「講義型授業における学生の学びを分析するための手法の開発を行うこと」と規定した。

第2章では、講義型授業における学生の学びを分析するための手法の開発を行うにあたって、講義とは何か、講義において求められる学びとは何か、その学びをどう捉え分析するかを確認した。特に講義において求められる学びを本論文では「内的に積極的・能動的に聴く」こととし、「講義内容に興味をもち、その上で、既有知識や経験に関連づけたり、思考したり、疑問を覚えたりなどの知識の再構成を行いながら講義を聴く」こととして捉えられることを明らかにした。また、学びを捉える方法として、①発言から学びを分析する方法、②記述物から学びを分析する方法、③内省報告から学びを分析する方法、④学習反応データから学びを分析する方法、⑤生理的計測データから学びを分析する方法、⑥表出行動から学びを分析する方法を体系的にレビューし、その結果として本論文では、「積極的に聴く」を

分析するために表出行動を用いること、「能動的に聴く」を分析するためにリアクションペーパーを用いることにした。

第3章では、「積極的に聴く」を分析するために表出行動を用いるにあたり、表出行動とは何かを確認した上で、これまで授業における学習者の表出行動がどのように研究の中で扱われてきたかをレビューした。その結果、これまで教室という場所において学生(学習者)が表出する行動とその内的状況(内面)との関係に注目している研究は、研究群Ⅰ＝臨床的だが非実証的な研究、研究群Ⅱ＝実証的だが実験室的な研究、研究群Ⅲ＝実証的かつ臨床的な研究に分類することができるが、それぞれ順に、経験的・感覚的なものにとどまる、実験室的である、包括性がないといった問題点があることが明らかとなり、まずこれらを克服した上で表出行動と内的状況の関連を明らかにする研究を行う必要があること、さらにその知見を用いた大学授業過程分析を行う必要があることを述べた。

第4章では、第3章で述べたことに基づき講義型授業における学生の表出行動と内的状況の関連を明らかにする研究を行った。その結果として、第一に、授業者を見る量が多い学生ほど授業の理解度が高いこと(ただし学生の多くが学びに対して積極的な授業ではこの限りでない)、自発的なメモが多い学生は興味度が高い傾向にあるが理解度は必ずしも高いとは限らないこと、ほおづえは理解・興味のいずれとも高い相関はないこと、居眠りは理解度とは負の相関であるが興味度とは必ずしも相関があるわけではないことが明らかとなり、第二に、学生たちが学びに対して消極的である授業では学生は興味深い授業場面で授業者を見る量が増加する傾向があり、学生たちが学びに対して積極的である授業では学生は興味深い授業場面で微笑みや自発的なメモの量が増加する傾向があることが明らかとなった。またこれらの知見を用いて、学生たちが学びに対して消極的である授業1事例と積極的である授業1事例における教授法の特徴を分析した結果、前者では講義の各所に余談(授業の本題とは必ずしも関係がないがおもしろい話)を挿入するという形で学生たちにとって興味深い授業場面がつけられているのに対し、後者では学生たちと本時の話題との結びつけ、認知的切実性のある問いの提示、布石の使用、重要場面でのユーモアの使用など多様なムーブ(手法)によって授業全体を知的で興味深いものにしようとしていることが明らかとなった。

第5章では、「能動的に聴く」を分析するためにリアクションペーパーを用いるにあたり、リアクションペーパーとは何かを確認した上で、これまでリアクションペーパーの記述内容から学生の学びを捉えようとしている研究を網羅的にレビューした。その結果、これまでリアクションペーパーの記述内容から学生の学びを捉えようとしている研究は【事実報告型＝記述内容をそのまま報告する研究】、【質的解釈型＝記述内容を解釈する研究】、【カテゴリー分析型＝記述内容をカテゴリーに分類する研究】に分類することができ、このうち【質的解釈型】の研究と【カテゴリー分析型】の研究は学生の学びをより深く捉えようとする研究であるが、それぞれ「分析のプロセスや根拠が決まっていなかったり見えなかったりするがゆえに高度な専門性が必要になる」、「学びの具体性を排除してしまったり学びの一側面

しか捉えられなかったりする」という難点があることが明らかとなった。ゆえに、これらの難点を克服したリアクションペーパーの記述内容の分析手法が求められるということ述べた。

第6章では、第5章で述べたことに基づきリアクションペーパーの記述内容に基づく学生の学びの分析・可視化手法を開発した。可能な限り学びを具体的に捉えるという「学びの具体性の保持」と可能な限り手続きが決まってい行いやすいという「分析手続きの定式化」を開発のための二大要件とし、それらを満たし得るものとして中道ら（2014）の「中間項」を参考とした。中道らの「中間項」は元のテキストデータを原文の具体性を保ちつつ構造化されたデータに変換するというものであるため、マルトン（2015）の学習の捉え方に依拠する形でリアクションペーパーの記述内容を構造化されたデータに変換し、クロス集計表に整理し、コレスポネンス分析とバブルチャートを適用することによって、「学生」と「学びの類型」の質的・量的な関連構造や「授業トピック」と「学びの類型」の質的・量的な関連構造を可視化することを可能にした。さらには、開発した可視化手法を用いて事例検討を行いことにより、学生自身にも既存の興味関心や知識があり、授業トピックにも「新奇性」、「不一致性」、「不明瞭性」などといった刺激が含まれていて両者の相互作用が起こるときに、【思考】を中心とした「能動的に聴く」授業が成立するという構造が明らかとなった。

第7章では、本論文で開発した分析手法を振り返るとともに、今後の課題を述べた。

#### <参考文献>

- 秋田喜代美・藤江康彦（2010）『授業研究と学習過程』放送大学教育振興会
- 伊藤茂樹（2015）「学生と生徒」『日本労働研究雑誌』657,62-63
- 小針誠（2018）『アクティブラーニング—学校教育の理想と現実』講談社
- 新立慶（2010）「大学生の「生徒化」論における批判的考察」名古屋大学大学院教育発達科学研究科編『教育論叢』53,67-75
- 田口真奈（2012）「大学教育改革と授業研究」水越敏行・吉崎静夫・木原俊行・田口真奈『授業研究と教育工学』ミネルヴァ書房
- トロウ, M. (1976)『高学歴社会の大学—エリートからマスへ』（天野郁夫・喜多村和之訳）東京大学出版会
- 中道豊彦・坂本篤史・深谷久美・野村昂平（2014）「新しい形式の中間項と数量化理論第Ⅲ類による授業内生徒発言布置構造の記述と変容シミュレーション」（柴田好章・中道豊彦・水野正朗・副島孝・坂本篤史・中島淑子・須田昂宏・埜寄志保・丹下悠史・付洪雪・堀田貴之・横山真理・近藤茂明・深谷久美・タン シャー リー・野村昂平・満田清恵・キラネチワリ（2014）「中間項による授業の記述とデータ解析に関わる諸問題の検討」『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要（教育科学）』60(2),105-128の第4章として所収）
- 日比裕・的場正美（1999）『授業分析の方法と課題』黎明書房
- ブライ, D.A. (1985)『大学の講義法』（山口栄一訳）玉川大学出版部

## 主論文の要約

松下佳代 (2009) 「主体的な学び」の原点—学習論の視座から」『大学教育学会誌』31(1),14-18

松下佳代 (2015) 「ディープ・アクティブラーニングへの誘い」松下佳代・京都大学高等教育研究開発推進センター編『ディープ・アクティブラーニング—大学授業を深化させるために』勁草書房

的場正美・柴田好章 (2013) 『授業研究と授業の創造』溪水社

マルトン, F. (2015) 「学習の教授学理論に向けて」(松下佳代訳) 松下佳代・京都大学高等教育研究開発推進センター編『ディープ・アクティブラーニング—大学授業を深化させるために』勁草書房

溝上慎一 (2014) 『アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換』東信堂

吉崎静夫・益子典文 (2012) 「特集号「大学教育の改善・FD」刊行にあたって」『日本教育工学会論文誌』36(3),167-170